

月刊

2013

2
月号

みんぱく

特集

はじめに光ありき

生体リズムと光 土居雅夫

衣装デザインと光 上羽陽子

光のふるまいから見る現代建築 塚本由晴

日本絵画における“光” 木村重圭

資料保存と展示と光 園田直子

資料保存と展示と光 園田直子



高校の授業中、歴史の資料集をみるのが大好きだった。暇さえあれば眺めていたが、今も時々思い出すページがある。中東から日本までの様々な塔が描かれたページだ。中東はエジプトのオペリスクのようなそびえ立つ石の塔、インドや東南アジアはストウバーのような丸みを帯びた塔、中国は鐘楼のような木造の塔で、日本は五重の塔が描かれていた。どちらがどちらに影響したかは定かでないが隣同士はともによく似ていた。歴史の中で人々や情報が行き交い、隣国の塔を研究し熟成させて独自の塔が生まれたのだろう。教室の片隅で、ひとり、歴史の大河を妄想して胸を熱くした！

同じことを感じたのは二〇代でNHKのディレクターをしていた時、アジア各地の獅子舞をたどる正月特番の取材中だった。インドの獅子舞はヒンズー教の神々、中国北部では五頭だての毛むくじゃらの獅子舞、中国南部ではきらびやかな曲芸する獅子舞。ベトナムにもバリ島にも独自の獅子舞があり、韓国では平たい仮面の赤と青の二頭だて。日本にたどり着いた後なんと三〇〇〇ものバリエーションとともに地域に根付いていた。佐賀や熊本では、韓国の仮面獅子舞や中国北部の毛むくじゃら獅子舞そっくりの型に出会った。ま

プロフィール
1971年、東京都生まれ。映画監督。NHKを経て独立。現在はドキュメンタリーを中心に制作。作品に『にがい涙の大地から』(2004年、黒田清・日本ジャーナリスト会議新人賞)、『ビューティフル アイランズ ～気候変動 沈む島の記憶～』(2009年、アジア映画基金AND賞、プロデューサー／是枝裕和)など。2013年、自身の出産と放射能をテーマに新作発表予定。www.kanatomoko.jp



一つの塔、一つのダンス、一つの言葉。

海南友子

た、赤い獅子頭に唐草模様の獅子舞や、東北の一人踊りの獅子舞など日本独自のものが育まれたことが歴史の中の奇跡に思えた。

そして一番最近では四年前に地球温暖化をテーマにしたドキュメンタリー映画の制作をしていたとき、南太平洋のツバルで、果物や動物の名前にハワイやインドネシアと同じ単語が使われていること、またそれが微妙に別の使い方であることに気づいた。どれだけ時間をかけて人々が島を移動して同じ言葉がちらばったのかと感嘆した。

一つの塔、一つのダンス、一つの言葉。名もなき人々が商売や宗教、戦争など悲喜こもごもの理由で交流を重ねてきた中から、かけがえない独自の文化が生まれた。残念ながら最近では移動手段や通信が発達しすぎて隣国の文化を熟成させて独自文化を生み出すことは難しくなってきた。でも、同じ服を着て、同じケータイを操り、同じニュースに涙する私たちは、別の形の新しい文化を形成しているのだとも思う。新しい文化はやがて歴史の一頁となり、何十年か後、誰かが私と同じように胸を熱くするのかもしれない。悠久の歴史、その中から生まれる奇跡の連続。私もそのひとつにならなりたい。

月刊
みんぱく
2月号目次

- | | |
|--|---|
| <p>1 エッセイ 千字文
一つの塔、一つのダンス、一つの言葉。
海南 友子</p> <p>2 特集
はじめに光ありき</p> <p>2 生体リズムと光 土居 雅夫</p> <p>4 衣装デザインと光 上羽 陽子</p> <p>5 光のふるまいから見る現代建築 塚本 由晴</p> <p>7 日本絵画における“光” 木村 重圭</p> <p>9 資料保存と展示と光 園田 直子</p> <p>10 研究フォーラム
民博の北方先住民コレクションの再検討
齋藤 玲子</p> <p>12 みんぱく Information</p> | <p>14 地球ミュージアム紀行
マケドニア博物館のお宝
ゴールデン・ニコロフ</p> <p>16 連載リレー 知の収蔵庫
CRPS とこんには! その3
「痛い」を伝える難しさ
菊澤 律子</p> <p>18 多文化をあきなう
フェアトレードを学ぶ、フェアトレードで学ぶ
織田 雪江</p> <p>20 異聞逸聞
あらたな聖地巡り
岩谷 洋史</p> <p>21 みんぱく私達の逸品
メノラー
菅瀬 晶子</p> <p>22 フィールドで考える
リセットされつつける酒場の時間
中田 梓音</p> <p>24 次号予告・編集後記</p> |
|--|---|

はじめに光ありき

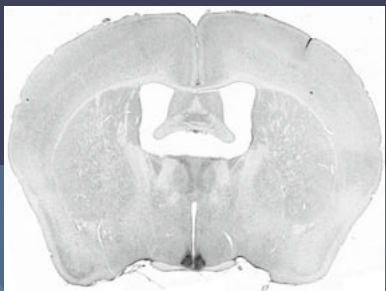
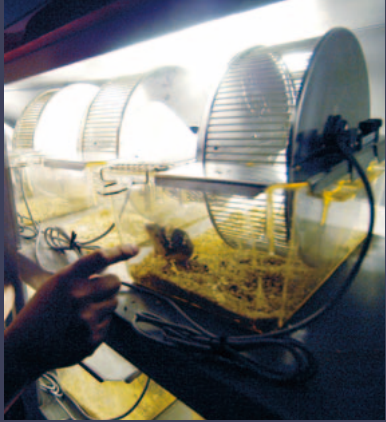
光をめぐる地球上の環境はさまざま。太陽光の強さや日照時間の差は、人間がつくりだすモノやシンボルの形に影響を与えてきた。

また、光のない場所に明かりを灯す人類の努力は、文明の進歩を促した。今や、通信、放送、医療などの分野で光を使った新しい技術が活躍する。一方で、人工の光は生体リズムに齟齬を生じさせたり、地球資源の枯渇をも招く恐れもある。

人と光はどのようにつきあってゆくのか？

生体リズムと光

土居 雅夫
京都大学准教授



右上：マウスの行動測定。単位時間あたりの輪回しの回数によって1日の活動変化をみることができ
右下：マウス脳断面。脳底に染まる左右一対の神経核が体のリズムを生み出す視交叉上核
左：朝日。1日の始まりを教えてくれる(撮影・千里文化財団)

からだに流れる内なるリズム

ひとの一生はたかだか数十年である。宇宙に流れる無限に近い時間のなかで、銀河系の地球に生まれ、わずかな時間を与えられる。かけがえない人生。ところがその時間は均質には訪れない。わたしたちの体は活動と休息の交代という一日周期で起こるリズム状態をとることが知られており、このリズムからひととは決して逃れられない。これは一日が決まった長さの周期で

変化する地球環境に適応するために太古の昔生命が獲得した「体内時計」とよばれる機能であり、地球上のほぼすべての生物が共通にもつ大変重要な性質である。わたしたちの体にも遺伝子プログラムとして書き込まれており、脳の奥底にある米粒にもみえない神経核(解剖学的名称は視交叉上核)が「時計」となっており、わたしたち人間の一日のリズムを生み出している。このおかげで、ひととはたとえ外部から隔離された洞窟のなかで暮らしたとしても、脳内の視交叉上核から発せられる時刻(内なるリズム)にしたがって無意識のうちに規則正しい生活を繰り返すのである。

内なるリズムが大地と共鳴する瞬間

朝日や夕陽を眺めたとき、我々はその優美な姿かたちや色彩に心打たれると同時に、その刻々と変わる光の強さから一日の時刻や季節の移り変わりを知る。地球上の生命は、光を空間認識のために用いる「視覚」の他に、光の強度変化を時刻情報に変換する「時覚」ともいべき優れた機能を有している。前者はひとの意識にのぼる知覚であるが、興味深いことに、後者は無意識のうちに処理される情報であり、用いられる神経回路も異なる。視覚の場合、眼の網膜で受容した光情報は視神経をつたって脳内の外側膝状体とよばれる領域へ伝えられるが、時刻情報としての光は、網膜から網膜視床下部路とよばれる別の経路をたどり脳内の時計中枢である視交叉上核へと伝達される。視交叉上核は、網膜から届く外部環境の光度変化を読み取り照合することで自身の時計の進み具合を日々補正する。暗闇から太陽が昇り、朝の光を眼にとらえた瞬間、わたしたちの内なるリズムは大地の時間に共鳴しはじめるのである。

人工の光に攪乱される現代人

光は、生物進化の歴史上、地球上のあらゆる生命にとってもっとも重要な環境の時刻情報を与えていた。気温の変化も時刻を知る手がかりとなるが、確実に訪れる昼と夜の明暗変化に比べれば安定性に欠く。光はもっとも信頼のおける時刻の情報源なのである。ところが、その常識が科学の進歩した現代社会では通じなくなってしまった。人びとは夜でも自由に電気を使え、ジェット機に乗れば地球の裏側まで飛んでゆける。生命史上前例のない劇的な環境変化が訪れたのである。時差ぼけや昼夜交代勤務、深夜まで続くテレビやインターネット娯楽、利便性の高い煌々たる照明下の二四時間営業店の利用によって、わたしたち現代人の生体リズムは知らず知らずのうち乱されており、これが不眠症や生活習慣病といった現代病を引き起こす一因となっている。最近テレビの教育番組で「朝は光を浴び、夜は強い照明を避けよう」と啓蒙されるのはそのためである。光と上手につきあうことが日々の健康な暮らしにつながるのである。



宗教舞踊用仮面
「スーリヤ(太陽の神、光の神)」
ネパール連邦民主共和国
標本番号 H0088921

衣装デザインと光

上羽陽子 民博文化資源研究センター



極彩色な衣装に身を包むインド西部のアヒールの女性たち

「どうしてこのような色を身に着けるのですか？」。わたしの調査地、インド西部の衣装を日本で見せると必ず聞かれる質問だ。ここでいう「極彩色」とは、赤色と緑色、黄色と紫色といった補色関係にあたる色づかいや、色相の離れた彩度の高い色と色とを隣り合わせに配置した衣装デザインのことを指している。たしかに日本ではこのような色づかいの衣装をみることは少ない。

インド西部グジャラート州カッチ県は、灼熱の土地である。年間降雨量四〇〇ミリメートル以下という乾燥地帯であり、ときには気温四〇度をこえる。日中の陽射しは鋭く、昼食後から一四時頃までは昼寝をして、暑さをしのぐのが習慣である。

このような鋭い陽射しのもとでは、色相の近い色同士の組み合わせや、淡い色味の組み合わせによるデザインや文様は、色味の境目が明確とならず、すべてがとんで見えてしまう。これでは、せつかくのデザインや文様表現も台無しである。強いライトがあたる舞台衣装などが、補色関係や色相の離れた色の組み合わせで構成されることからわかるだろう。強い光のもとで表現した文様が映えるためには、はつきりとした彩度、明度、色相の違いが必要なのである。

日本ではこのような色づかいの色とりあわせをみることが少ない。日本はとりわけ曇天が多いのである。気象庁の調べでは、東京の過去三〇年間の平均値で、年間に一四四日が曇天である。曇り空の下では、淡い色彩や色相のわずかな違いも明確に区別することができる。そのため、微妙な色の組み合わせ



インド西部、ラバーリーの女兒。紫色と橙色、紺色と赤色といった色彩対比は、灼熱の陽射しのなかでもひとときを目立つ

光のふるまいから見る現代建築

塚本由晴 アトリエワン 東京工業大学大学院准教授

研究室の学生達と、世界中の窓を見て回る調査（YKKグループとの協同研究）をしている。最初の三年間に約二〇都市を巡り、そこから厳選した一四三の窓を、『Windowscape 窓のふるまい学』（フィルムアート社、二〇一〇年）に収録した。なぜ窓かという、設計の際に考慮する光、風、熱など自然の要素のふるまいと、人のふるまい、そして建物のふるまいに注目した「ふるまい学」によって新しい建築理論を構築しようと考えてきたときに、さまざまな種類の「ふるまい」が、建築の内と外のあいだで相互に作用しあう場所が窓であるからである。建築というのは動かない物質の構成として固定されているが、その構成によって人のふるまいの範囲も、自然の要素のふるまいの範囲をも決めることができる。また、少しスケールを変えて町並みに目を移せば、窓の反復も景観のなかでの窓の集合的な「ふるまい」として観察できる。このように異なるふるまいが出会い、人のふるまいと自然環境のふるまいのそれぞれ固有なリズム（時間尺度）が重なり合う場所が窓なのである。とくに伝統的な窓では、地域固有の風土と建設技術、生活習慣といった多種多様な事柄への配慮のあいだに独特の均衡関係をつ

イタリア、ボジターノの斜面に位置するホテルの窓



くり出している。それらは長い年月のあいだに人びとが試行錯誤を繰り返してたどり着いた形式である。

重さからの解放

しかし近代以降は場所の違いを超えて、どこでも同じように建築が作られることに価値が置かれた。技術が場所の違いを凌駕することを、技術の勝利として称揚したのであった。それがもつ

わせも綺麗にみえる。その一方、曇天では、彩度の高い色の組み合わせや、補色の色はどうしても受けがけにくくみえてしまう。陽射しとデザインは、密接に関係しているのだ。

また、インド西部には、衣装にガラスミラーを縫いつけるというデザインがある。王侯貴族の服に宝石や光沢をもつ鉱石の雲母を縫いつける刺繍技術がもとになっている。一七世紀のムガル王朝時代にガラスをつくる技術が発達したことから、吹きガラスの内側に溶かした錫を流し込んでつくったガラスミラーの破片を縫いつけることが、一般の人びとへも広く普及したといわれる。鏡片の輝きの効果は、陽射しのもとでは発揮されない。衣装にびつしりと縫いつけられた鏡片は、漆黒の闇夜にとりおこなわれる儀礼において、灯明の光をうけて、きらきらと輝く。鏡片には邪視除けの意味もあるというが、人びとは、身動きするたびに灯明の反射によってきらきらと輝く光に心を奪われる。非日常の光に神聖さや、清浄さを感じとっているのかもしれない。

とも明確にあらわれたのが窓である。その技術的背景には壁構造から柱梁構造への転換があった。開口部は基本的にどこにでもつくられるようになり、全面カーテンウォールも可能にした。組石造における室内の光は、壁のなかから石を外していくことによって掘り出されるようなものだったから、床から天井までガラス張りが可能になることは、重さからの解放をも象徴していた。窓を「廃棄した」このような表現は人気を博し、すべては



め殺し窓で開けられない建築が多く作られた。その結果、夏の日射によって室内が温室のように暑くなるうと、そこはまた工業技術に頼ってエアコンで冷やせば良いとする建物ばかりになったのである。これは光を取り入れることが優先されすぎて、室内の熱的環境への配慮が均衡を失った状態である。そんな単純なことを現代の建築はコントロールできないのかと、驚かれるかもしれないが、それほどまでに建築家ははじめとした人びとの、重力からの解放や透明性へのあこがれ、光へのあこがれは強かったわけである。その想像力が行き着くところは、物質としての重さを失って光だけで満たされた空間である。

「いま、ここ」から「いつか、どこか」へ
それは、もろく儂い現象のような建築空間への指向（エフェメラルな空間とよばれる）を生み出し、建築家の想像力をかき立てた。じつはここ二〇年来の日本の現代建築こそがそのトップランナーであり、その卓越した表現は世界中の注目を集めた。しかし、その一方でこの傾向が建築設計における配慮を「いま、ここ」に関することだけに狭めてしまったのではないかというのがわたしの見立てである。なぜなら、もろく儂い現象は「いま、ここ」でしか観察できないから。わたしはそのことは、必ずしも人間の

生きる条件を豊かにするわけではないと感じている。むしろ地域の特性や文化的習慣などとも成立してきた古い技術である建築には、人びとを「いま、ここ」から解放し、「いつか、どこか」へとつなげる力がある。そのことによって、「いま、ここ」にいない神や昔の人びとまでがそこにいられるようになる。その方が豊かではないか。もちろん建築にとって光の大切さは変わらない。しかし、これからの建築は、窓に限らず建築の形式に備わっている知性にそれぞれの場所の条件に合った配慮を加えて、新たな均衡を探しあてるものになるだろう。



プロチダ島の集落キアイオレラの住居の窓

日本絵画における「光」

木村重圭 甲南女子大学教授

間接光線のなかの世界

日本の絵画において、「光」、「光線」を意識して描くようになるのは、近世になってからである。それは多分に西洋絵画の影響と考えられる。光源には自然光と、人工の明かりがあげられるが、日本の絵画を眺めてみると、その多くは屋の光線（太陽光）のなかの光景を描いている。しかし、そこには陰影の表現がまったく見られない。



『法然上人絵伝』八巻一段（部分、知恩院蔵）
『続日本絵巻大成第1巻 法然上人絵伝（上）』中央公論新社、1981年より転載

即ち、人物や動物、建物、景物等に影が描かれていないのである。光の方向性をまったく意識することのない、完全な間接光線のなかの世界である。屋内の光景を描いてもそうであり、ましてや夜の室内に於ける場面にあつても、明かりの存在を示していない。多分に写実的な西洋絵画の目から見ると極めて不思議な世界であった。浮世絵版画が欧米人を魅了した大きな要因のひとつも、それであったのだが。

西洋絵画の影響

キリスト教の伝来とともに、南蛮美術が展開され、西洋風の絵画が描かれるようになる。「西歐王侯騎馬図屏風」（重文、神戸市立博物館、サントリイ美術館蔵）には馬の足の影が描かれ、同一色に濃淡の表現が見られる。この期の洋風画には、他にも見られるが、いずれも原画をそのまま写したにすぎないであろう。

江戸期に入ると、かなり「光」を意識した絵が描かれるようになる。二、三例をあげると、英一蝶（二六五〜二七二四）の「四季日待図巻」（重美、出光美術館蔵）には、室内で遊興に耽る人びとの姿が障子に映し出されている。また、与謝蕪村（二七二六〜二七八三）の「暗夜漁舟図」（逸翁美術館蔵）は、舟の上で焚火に照らし出された木々の枝を、くつきりと描いている。長沢芦雪（二七五四〜二七九九）の「月夜山水図」（重美、穎川美術館蔵）は、山の端に満月が昇り、月に照らされた山と陰になる山を描きわけ、「光」の方向性を表現している。さらに、江戸も中期以降に入ると、オランダを通じて西洋画法が伝わり、洋風画の展開とともに、「光」を意識して描くようになる。司馬江漢（二七四七〜一八一八）らの作品に見られるところである。

そうしたなかで、特に印象深い場面は、「法然上人絵伝」（国宝、知恩院蔵）の第八巻、第一段である。法然上人が暗夜に目より光を放って読書をしている場面を描く。薄墨と淡い群青を刷いで部屋全体を薄暗く表現したなかで、机の前に書を開く法然のふたつの目から「光」が発せられている。ここには明らかに光源が描かれている。月夜の光景を描いた作品に「柴門新月図」（二四〇五、国宝、藤田美術館蔵）がある。庵の柴門の前で、客を送り出した主人と客の二人が、別れるに忍びなく立話をしているところであろう。二人の頭上には、くつきりと円い月が浮かんでいる。しかし、二人の人物には影は無く、全体の薄闇のなかに、くつきりと描き出されている。まったく不思議な世界である。

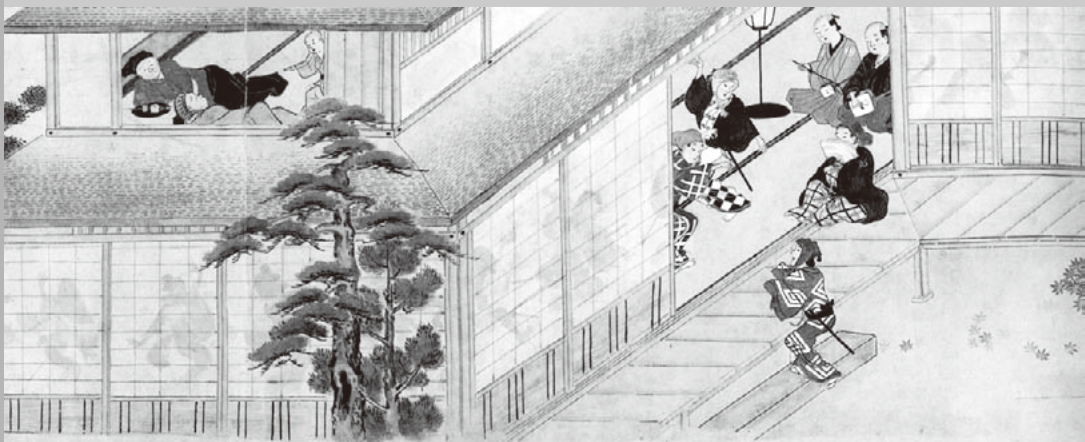
金のもつ光への憧憬

日本には「金地」「金雲」の屏風や襖絵が存在する。金箔の上に濃彩や水墨で描いたもので、恐らく日本独自の表現であろう。「金」は古今東西を問わず人びとがもつとも憧れ、求めたもので、その「金」を薄く延ばした金箔を貼り詰めたなかに、絵を描いている。狩野元信（二四七六〜一五五九）筆「四季花鳥図屏風」（六曲一双、重文、白鶴美術館蔵）が、遺品としてはもつとも古く天文一八年（二五四九）の制作である。より古い例として、「慕婦絵詞」（重文、西本願寺蔵）の第一巻、第一段の覚如誕生の場面に、金地着彩の松を描いた六曲一双の屏風が見える。この巻は文明一四年（二四八二）の制作で、元信の屏風より

七〇年近くも早く、この頃にはすでに金地の屏風に描かれていたことが知られる。さらに、一六世紀後半、桃山時代を迎えると狩野永徳（二五四三〜一五九〇）に象徴される豪華華麗な金碧障壁画の世界が展開されることとなる。この金碧障壁画は以後江戸時代を通じて、日本各地の城郭の殿舎や寺院の書院などで描き継がれていく。自然光、人工光線を表現して来なかった日本の絵画ではあるが、「金」のもつ独特の「輝き」への執着が強く印象づけられる。日本人の自然光とは違った「金」のもつ「光」への憧憬といえるのではないだろうか。



『月夜山水図』長沢芦雪（額川美術館蔵、開館40周年記念展「美と歩む——コレクションの優品」
2月17日（日）〜3月31日（日）にて展示予定）



『四季日待図巻』英一蝶（部分、出光美術館蔵）

資料保存と展示と光

そのだ なおこ
園田直子 民博文化資源研究センター

光がないと、ひとは何も見ることができない。しかし光は、退色など資料をいためる原因でもある。博物館・美術館では、光を「資料をいかに自然かつ効果的に見せるか」という演示効果とともに、「資料の劣化をいかに抑制するか」という保存の観点、この両面から考慮している。

資料保存と光

光源は、太陽からの自然光と、人工的な光（蛍光灯、ハロゲンランプ、LEDなど）にわけることができる。光により照らされている面の明るさの

度合いを照度（単位lxルクス）とよび、染織品、水彩画、カラー写真など光に脆弱な資料の場合には、照度を低く設定し、展示している。また、照明の与える影響は積算されるため、観覧者がいるときだけ照明をつけたり、時間のサイクルのなかで照度を変化させたりして、照射時間を短くする工夫をしている館もある。

光源からは、ひとの目に見える光（可視光線）のほかにも、紫外線や赤外線などの不可視光線がでてくる。紫外線は、可視光線よりも波長が短く（エネルギーが高く）、材質の劣化を早めてしまう。赤外線は、まわりの温度を高めるはたらきがある。博物館・美術館では、「見る」ためには必要のないこれらの不可視光線を、光源からとり除くようにしている。紫外線を多くふくむ蛍光灯では、紫外線吸収膜を施した美術館仕様のものを選ぶ。赤外線が問題になるハロゲンランプには、例えばダイクロイックミラーという反射板をつけるなどして、熱線を逃がしている。

展示と光

同じ色のモノでも、照らす光のちがいでによって色の見えかたが変わり、このような光の性質を演色性とよぶ。自然光のもとで見える色のバランスに近いほど、その光源の演色性が高いと評価できる。演色性が問題になるのは、とくに蛍光灯とLEDである。蛍光灯では、美術館用として演色評価数が高いタイプが市販されている。LEDは、その発光原理から赤色領域の波長が少なく



展示場での照度測定。照度は、もっとも光があたっているところで測定する

赤色がきれいに見えない欠点があるが、近年、改良が進んでいる。

光の色は、さまざまである。光の色を数字であらわしたものを色温度（単位Kケルビン）という。色温度が高いと青白い光となり、クールでさわやかな印象をあたえる。色温度が低いと赤みのある光となり、落ち着いた雰囲気になる。

展示では、全体を均一に照らすのか、ある資料を際立たせたいのかにより、光のあてかたが異なってくる。また、ひとの目は暗闇から明るいところへ行くとき最初はまぶしく感じるが、すぐに慣れてくる。逆に、明るいところから暗いところへ行くと、目が慣れるのに時間がかかる。照明の光が直接、観覧者の目にあたらないことにも注意しながら、照明設計はこなされている。

博物館・美術館の光は、このように展示と保存の微妙なバランスでなりたっている。



直射日光を遮る衝立と幕（2012年特別展「世界の織機と織物」）



民博の北方先住民コレクションの再検討

さいとう れいこ
齋藤 玲子
民博 民族文化研究部

民博の収蔵品のなかには、他施設から引き継いだ旧蔵資料が多数存在している。それらの再検討は、資料情報のよりいっそうの充実をめざすことに加え、その資料が収集された背景や研究の状況をつまびらかにしていく作業でもある。

研究の目的

民博には、アイヌ民族の生活用具や儀礼具などの標本資料が四〇〇〇件以上収蔵されている。赴任してからの二年あまり、二〇一二年の特別展「千島・樺太・北海道 アイヌのくらし」の資料リスト作成に始まり、展示解説や執筆にあたって、何度となく標本資料データベースを利用した。そのたびにあらたな発見もあるが、情報不足や誤りを残念に思うこともあった。逐次、情報を追加・修正してゆくことはできるが、ひとまとまりのコレクションとして検証するほうが効率的で、適切な評価ができると思われる。そこで、本館が所蔵するアイヌ、ウイルト、ニヴフの標本資料のうち、明治から終戦までに収集されたものを再検討するため共同研究を、二〇一二年一月からスタートさせた。第一の目的は、これらの資料に関する情報をより正確なものにするところにある。しかし、それだけにとどまらず、各民族の物質文化、言語、博物館資料管理等の専門家が共同で研究をすすめる、人類学または民族学者と被調査者・資料提供者との関係など、資料が集められた当時の研究状況と社会的な背景をも明らかにしたいと考えている。

研究の背景

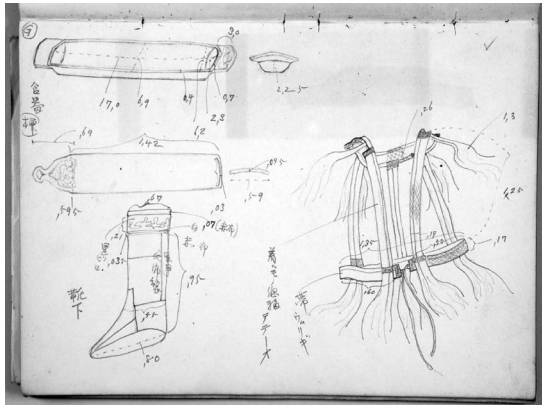
本館所蔵の北海道、樺太、千島の民族資料



胸衣 (標本番号 H0025587)
ヤナギなどの木を薄く削ったものはさまざまに儀礼具に用いられる。その削りかけを編んで作られたシャマンの胸衣

と、アチック・ミュージアムから資料を引き継いだ日本民族学会附属民族学博物館(後に文部省史料館に寄付)の旧蔵資料である。この二大コレクションは、十分ではないものの、資料の台帳やカードが付されており、番号、資料名、収集地、収集者、収集年月などの情報が記載されているものもある。収集者が明らかな資料は、調査報告をはじめ、当時の新聞や雑誌、また近年になって発見あるいは公開されるようになった研究者の日記やフィールドノートなどから、詳細な情報が判明するケースも少なくないと考えられる。

たとえば、東大人類学教室の講師で、東京人類学会誌の編集をおこなっていた石田

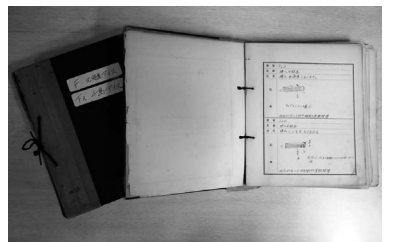


石田収蔵のノート。左上の③はニヴフの当時の呼称「ギリヤーク」をあらわす(板橋区立郷土資料館提供)

組み立てられずにバラバラになっていたが、石田ノートの記載から名称と構成がわかり、二〇一一年の特別展で復元展示することができた。アチック・ミュージアムの旧蔵資料にも石田が収集したものがあり、削りかけで作られた胸衣ほどの民族のものか不明となっていたが、ノートにはニヴフであることが記されていた(しかし名称はウイルト語であり検証が必要)。共同研究のメンバーには、板橋区立郷土資料館の館長に加わっていただいております。石田資料の解析をさらに進めたいと考えています。

民族学研究と北方先住民

個別の収集時の状況をみてゆくと、生活



東京大学旧蔵資料のうち北海道、千島、樺太の目録

料のうち、第二次世界大戦終戦までに収集されたのは、アイヌのものが一〇〇〇点以上、ウイルトが二八〇点以上、ニヴフは七〇点以上と推定される。ウイルトとニヴフはサハリンの先住民で、日本がサハリンの北緯五〇度以南を領有していた一九〇五(明治三八)年から一九四五(昭和二〇)年のあいだにもな調査・収集がおこなわれた。千島においても、一八七五(明治八)年の樺太千島交換条約以降に調査・収集がおこなわれた。アイヌの資料は三地域すべてにわたっている。現在では収集できない貴重なものが多数含まれており、伝統的な特徴をよく残しているため、物質文化の研究を進めるうえで極めて重要である。

データの見直しと情報の追加

民博が開館する前に収集されたこれら資料の大部分は、東京大学理学部人類学教室

の変化で不要になったために簡単に譲ってもらえた民具もあれば、お金のために手放した儀礼具や、移住によって無人になった集落の倉から持ち出されたものなど、さまざまである。こうした情報も資料の理解には欠かせない。

また、収集の全体的な傾向は、当時の人類学・民族学の潮流を表したものであるだろう。日本人の起源の探究、周囲の民族との文化的比較、あらたな領有地の資源とその活用——など、この時代の日本国家と日本社会がアイヌやウイルト、ニヴフといった北方の民族をどのように見ていたかを示していると考えられる。

今秋の特別展ではアチック・ミュージアムの資料を展示する予定であり、平成二七年度には本館展示のアイヌ文化と中央・北アジアの新構築が予定されている。かつて隣人から収集されたこれらの資料をどのようにに展示し、いかに受け継いでゆけばよいのか。そのヒントを見つけるべく、共同研究をすすめていきたいと思っております。

共同研究

「明治から終戦までの北海道・樺太・千島における人類学・民族学研究と収集活動」国立民族学博物館所蔵のアイヌ、ウイルト、ニヴフ資料の再検討
代表：齋藤玲子
2012年10月〜2016年3月

◆パンセミナー(全4回)
小麦とライ麦は世界の食文化の中で大切な穀物です。ヨーロッパでは多様な形態のパンとして広く利用されています。このパンとヨーロッパの文化との関係をフィンランド、ルーマニア、ドイツ、イタリアの専門家が語ります。

▼第3回 2月23日(土)
「ドイツのパンー地方の特徴、そして伝説」
講師 森明子(国立民族学博物館教授)
▼第4回 3月9日(土)
「イタリアの日常生活とパン」
講師 宇田川妙子(国立民族学博物館准教授)

各回とも
時間 14時30分～16時(受付開始14時15分)
会場 国立民族学博物館 食堂(本館1階)
参加費 一人あたり500円
対象 中学生以上
定員 一回につき40名
※有料、要申込
申込締切 第3回、第4回 2月8日(金)
第3回、第4回 2月8日(金)

特別展
「マダガスカル霧の森のくらし」
マダガスカル東に広がる熱帯雨林から、山をのぼって標高1000メートルあり。そこにある霧の森では、人ひとが森に寄りそって生きています。釘を使わず建てられ、幾何学的な意匠が刻まれた木造家屋。なんの変哲もない静かなくらしに伝わる、霧の森のものづくりをご覧ください。
会期 3月14日(木)～6月11日(火)

「やっぱりヨーロッパ——春のみんなくフォーラム2013」
会期 3月23日(土)まで
多様な歴史・文化・信仰から生み出された生活様式、近代の産業化を可能にした労働の力たち、現代のグローバル化による人の移動と文化の交流が生み出す創造力。ヨーロッパの魅力をさまざまなイベントを通してご紹介します。

国際研究フォーラム
「バルト海周辺地域の日本コレクシオンⅢ」
日時 ①2月2日(土) 10時30分～16時45分
(開場10時)
②2月3日(日) 10時30分～16時30分
(開場10時)
会場 第4セミナー室
定員 60名
※参加無料、申込不要、同時通訳あり

国際シンポジウム
「モンゴル国における鉱業開発の諸問題——歴史的視点から」
日時 2月15日(金) 10時～18時
会場 第4セミナー室
※参加無料、要申込、同時通訳あり

国際シンポジウム
「布を使う人、布に包まれるからだ」
日時 2月23日(土) 10時～17時
会場 第4セミナー室
※参加無料、要申込、同時通訳あり

「Exhibiting Cultures: Comparative Perspectives from Japan and Europe」
(和題 文化を展示すること)
——日本とヨーロッパの遠近法を考える——
日時 3月17日(日) 10時～17時
会場 第4セミナー室
※参加無料、要申込、同時通訳あり

みんなく公開講演会
「なんだ？日本の文化って——芸能からMANGAまで」
今回の講演会では、沖縄と日本本土の民俗文化が複雑に交わる奄美の芸能・音楽と、香港と台湾における日本の大衆文化(漫画など)の受容を題材にして、日本文化の境界やダイナミズムを問い直す講演をおこないます。
日時 3月22日(金) 18時30分～20時45分
(17時30分開場)
会場 オールホール(大阪市北区梅田 毎日新聞社ビル地下1階)
定員 480名(先着順)
※手話通訳あり
※参加無料、要申込
※申込方法
「3月22日公開講演会参加」と明記の上、氏名・郵便番号・住所・電話番号・今後の民博参加申込方法

友の会
友の会講演会(大阪)
会場 国立民族学博物館 第5セミナー室
定員 96名(当日先着順、会員登録必須)
第417回 3月2日(土) 14時～15時
フィールドワークを語る
ヨソモノが感じ、考えたこと
講師 小林繁樹(国立民族学博物館教授)
ニューギニアの贈物交換活動とヤップ島のサアという情報伝達についての調査が、私の最初の研究課題でした。「人は何を、どのように伝えあっているのか」という問いについて、ヨソモノが調査において遭遇したエピソードを交えながらお話しします。
第418回 4月6日(土) 14時～15時
特別展「マダガスカル霧の森のくらし」関連
マダガスカル中央高地のザフィマニリ文化
講師 飯田卓(国立民族学博物館准教授)
アフリカ地域にありながら、東南アジアからの文化的影響も受けてきたマダガスカル島。そう聞くとエキゾチックなようですが、どこかしら日本の山村を思わせるような一面もあります。霧の森にくらすザフィマニリの人びとを紹介いたします。

東京講演会
会場 JICA市ヶ谷ビル セミナールーム600
定員 80名(要申込)
第105回 3月30日(土) 14時～16時
特別展「マダガスカル 霧の森のくらし」関連
何処にもある何処にもない世界 マダガスカル
講師 深澤秀夫(東京外国語大学教授)
飯田卓(国立民族学博物館准教授)
マダガスカルにはインド洋を行き交ったアジア、アフリカアラブ、ヨーロッパの人ひとの「千年余りの「記憶」が随所に刻まれています。言葉や生活文化を丁寧によみとくことで、文献には記されていないその歴史にせまります。

主催催物の案内希望の有無(次の①～③のうち希望する番号)▼①講演会を含む民博主催の催物の案内を希望する/②講演会のみ案内を希望する/③いずれの案内も希望しない)を書いて、ハガキ、FAX、メールにて左記「研究協力係」までお申し込みください。
FAX 06・6878・8479
E-mail: koenkai@dc.minpaku.ac.jp
お問い合わせ先
研究協力係 研究協力係
電話 06・6878・8209

●展示場リニューアルのお知らせ
本館展示場「日本の文化」展示のうち「祭り」と芸能」と「すまじとくらし」の二部がこの3月に新しく生まれ変わります。それに伴い、「日本の文化」展示全体が工事のため閉鎖されます。
閉鎖期間 3月21日(木)まで
※イベントや刊行物について、くわしくはホームページをご覧ください。
※電話でのお問い合わせの受付時間は9時から17時(土日祝を除く)です。

刊行物紹介
■坂本龍一・塚田健一・川瀬慈・分藤大翼 他 著
『Traditional Music in Africa』
(schola第11巻「アフリカの伝統音楽」)
Commons 定価:8,925円
この本ではアフリカの伝統音楽を「ミニマル・ミュージック」という新たな観点からとらえ、ある種のポストモダンな音の世界として提示しました。添付CDには、日本ではまだ紹介されたことのない、研究者によるアフリカでの貴重なフィールドレコーディングも含まれています。
販売価格 2万円(予定)

みんなくフォーラム

会場 国立民族学博物館 講堂
時間 13時30分～15時(13時開場)
定員 450名(当日先着順)
参加費 無料(展示をご覧になる方は、観覧料が必要です)
第417回 2月16日(土)
「春のみんなくフォーラム2013」関連
変わるヨーロッパの言語地図
——多言語「社会から」多言語「社会へ」
講師 庄司博史(国立民族学博物館教授)

20世紀後半以降ヨーロッパの多くの国では、移民の増加や地域的少数言語運動の活発化により、さまざまなことが社会のなかで顕在化はじめています。ヨーロッパ発祥の「一言語主義はどこにむかうのでしょうか。」
大統領選挙も多言語でキャンペーン(ヘルシンキ)

第418回 3月16日(土)
「春のみんなくフォーラム2013」関連
家族の今——イタリアの事例から考える
講師 宇田川妙子(国立民族学博物館准教授)

現在、先進国ではどこでも少子化と高齢化の問題が深刻化し、様々なレベルで家族関係を考え直そうとする機運が高まっています。なかでも日本の状況とよく似ているイタリアの家族事情を紹介しながら、家族のこれからの考えます。
祖母の兄に教えられながらブドウ収穫を手伝う子供

国立民族学博物館友の会 電話 06-6877-8893 (平日9時～17時) FAX 06-6878-3716
http://www.senri-f.or.jp/ e-mail minpakutomo@senri-f.or.jp

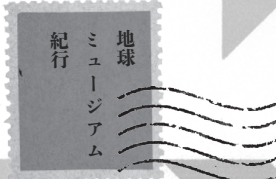


国立民族学博物館 ミュージアム・ショップ
電話 06-6876-3112 FAX 06-6876-0875
e-mail shop@senri-f.or.jp 水曜日定休
ウェブサイトもご覧ください。オンラインショップ [World Wide Bazaar] http://www.senri-f.or.jp/shop/
マダガスカル ザフィマニリの椅子
3月14日から特別展「マダガスカル霧の森のくらし」が開催されます。
ザフィマニリの人たちのくらしと木彫り作品をつうじて生活に息づく技術や伝承について考える展示です。ユネスコ無形文化遺産に指定された、ザフィマニリの人たちの木彫り。その代表が、幾何学模様を彫りこんだ組み立て式椅子です。幾何学模様はもともと木造家屋に彫られていたもので、椅子の様式は20世紀にアフリカ大陸部からとり入れられました。
いまショップでは、このザフィマニリの木彫りの椅子の予約製作販売を承っております(数量限定)。実物をショップに展示しております。
予約方法等についての詳細はショップスタッフにお問い合わせください。

マケドニア博物館のお宝

ゴルダン・ニコロフ

民博外国人研究員
マケドニア博物館上級キュレーター



遺跡や遺物で名をはせるところでは、とにかく考古学的な話題、価値が注目されがちだ。現代にいたるまで、その地に暮らしてきた人びとの営みも、その国家にとって、価値ある「お宝」のひとつなのではないだろうか。

文明の十字路、マケドニア

マケドニアの起源はペリディカがマケドニア王国を創建した紀元前七世紀までさかのぼる。その後フィリッポス二世の治世にさらに栄え、アレクサンドロスの遠征によってその勢力はインドのヒマラヤやエジプトのピラミッドにまでおよんだ。一九九一年に旧ユーゴスラビアから独立した今日のマケドニア共和国は、ヨーロッパ、アジア、地中海世界を結ぶ南東ヨーロッパのバルカン半島中部の重要な位置にある。古代文明、ビザンチン、スラブ、トルコなど、さまざまな文化、民族が混成してきた土地である。

首都スコピエの古い市場の中心にあるマケドニア博物館には、この国のエッセンスが詰まっている。二万平方メートルの敷地に六千平方メートルの展示スペースが広がり、考古学、民族学、歴史、中世美術の四つの部門から構成されている。旧石器時代、つまり紀元前一万年から、第二次世界大戦終了までの資料が合わせて六万点ほど収蔵されている。

充実した民族学部門

マケドニア文化の歴史に親しむには、ぜひ民族学部門の常設展を訪れてほしい。なかでも民族衣装と装飾品のコレクションは一番の見どころである。頭飾りやテクニクには飾りや刺繍が施されていて、特に、花嫁衣装は美しい文様で装飾されている。これらの模様は単なる飾りとしてだけでなく、子沢山、魔除け、夫婦円満を願う象徴的な機能ももっていた。

もつとも見応えがあるのはソカイ、ウブルスとよばれる頭飾りであろう。赤・黒・白のふさ、古銭「モニストラ」という小さなビーズ、貝殻などたくさんの飾り付けが見られる。精巧な装飾品は古い魔除けの象徴的要素を示している。一九世紀末から二〇世紀前半に作られたテクニクに施されている刺繍には中世の支配階級に特有であった文様が見られ、当博物館の所蔵品である一四世紀フレスコ画に描かれた女性の衣装と共通する。中世から今日まで途絶えることなかった伝統の連続性に驚く。

この連続性は色使いにも現れている。もつとも重要なのは赤色で、微妙に異なるさまざまな赤のトーンは自然染料を使った染めの技術による。この技術は二〇世紀初頭まで広く使われていた。赤の次に好まれたのは黒で、緑、濃い灰色、黄色、白も多少含まれた。刺繍は、直線やジグザグなどの単純な形から、より複雑な幾何学模様や葉や茎のない花文様の組み合わせよりなっている。

村落、都市部を問わず、宝飾品もマケドニアの伝統的女性の衣装の重要な一部であった。アクセサリーは美しいだけでなく、社会的なステータス、信仰を示すものであり、また厄除けの意味があった職人が作ったものもあれば、自家製のものもあり、またその種類は素材や製作方法によっていくつものカテゴリーに分類される。植物性素材にはバジル、キツタ、メギ、ゼラニウム、バラなどがあり、動物性の素材は羊毛でできたふさ・組みひも・フェルトボール、色が施された羽などである。その他の素材としては、モニストラ（ビーズ）、貴金属などが挙げられる。

特に、金、銀、真鍮、銅などの貴金属で作られたアクセサリーの種類はじつに多彩である。「パフタ」とよばれるベルトのバックル、「テペラク」という頭飾り、イヤリング、首飾り、十字架、「テュステク」という鎖などの独特の装飾品はマケドニアのさまざまな地方に根付いた伝統を受け継いでいる。線状細工、粒状細工、鑄造、浮きあげ細工などの加工法の他に、真珠、珊瑚、貴石、装飾ビーズによる飾り付けが見られる。これらはストルガ、オフリド、ピトラ、プリレプ、クルセヴォ、スコピエ、デバルなどにあるマケドニアのもつとも著名な工房の金属細工の名人たちの手による。かつてはマケドニア各地だけでなく、バルカン半島全体にも、こうした装飾品が流通していた。

この他にも、マケドニア博物館では、建築、木工作品、商業道具、農具、楽器、陶・木・金属製の日常道具なども常設展示されている。マケドニアというアレクサンドロスを連想する方が多いかもしれないが、この国の複雑で重層的な歴史を物語る文化遺産は古代の遺跡や遺物だけではないのである。

(山中由里子記)



筆者の専門である陶器の展示

都市部の伝統建築と「トルコ風」衣装の展示



民族衣装の展示



マケドニア博物館の外観。背景に見えるのは、オスマン帝国時代の名残であるモスク



CRPSとこんなには！ その3

「痛い」を伝える難し

菊澤 律子 きくさわ りつこ
民博民族文化研究部

CRPS（シー・アール・ピー・エス、複合性局所疼痛症候群）は、交感神経が過剰に興奮することでおこる神経性疼痛が主訴の病気。怪我などの物理的な外傷が引き金になるとされるが、はっきりした原因がわからないことも多い。オランダでの調査（一九九六―二〇〇五）によると、発症する人は年間四千人に一人。診断がつかず苦しんでいる人はその五倍、という説もある。痛みは我慢するものとされる日本では、後者の割合がより高いのではないだろうか。



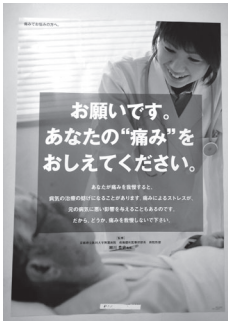
2007年の時点では、CRPS患者には「ご法度」とされていた整形外科手術も、麻酔の組み合わせ方などで可能に（2010年12月）

「不便の形」を表現すること

「薬になった、なんて言ったら、相手の先生は本当に薬になったと思わはるでー！」

ある日、わたしは主治医のF先生に診察室で叱られていた。

CRPSの治療のひとつにブロック注射がある。その場で劇的に楽になるわけではないが、麻酔をかけることで交感神経の興奮を落ち着かせる効果がある。毎週のことになるので、職場に近い病院あてに紹介状を書いてもらったのだが、数回打った後に「もうやめる」という話になってしまった……という報告をしたところ、上記の顛末。



言われてみれば確かに、わたしにとっては「痛い」が前提なのだが、この病気に馴染みがない先生からしてみれば「薬になった」と聞けばイコール「改善した」となるのだろう。「痛みの性質に微細な変化がみられ

た」とでも報告すべきだったのかもしれない。それにしても、どうしてF先生には、詳細を話したわけでもないのに、わたしの病状のみならず、相手先の病院でわたしが何をどう表現したのかまでわかってしまったのだろうか。診察室でのコミュニケーションは難しい。一方で、話さなくても理解してもらええる例も、こんな風に存在する。

想像するに、患者の語りは医者が聞きたい形では出てこない。治療する側が知りたいのは「病気の形」だと思うのだが、病気や怪我は日常生活のなかに存在しており、患者にとってはそこで生じる「不便の形」が問題だ。わたしも一度、痛みがひどくて仕事ができず困っている、と診察室でうっかり言ってしまう、「それは職場とご相談されればいいことではないですか？」とパソコンの画面を見たまま言われて無然とした経験がある（もちろんF先生ではない）。「診断がつけば対応の仕方も見えてくると思いますよ」などとひとこと、顔を見て言ってもらうだけで、ずいぶん気持ちが変わったと思う。ブログ等における闘病記の数は、患者側にとって自分を語るのがいかに大切かを反映している。そのような叙述が、医療の立場でどのように理解され、実践されようとしているのか、リタ・シャロンの『ナラティブ・メディスン——物語能力が医療を変える』は、読むのを楽しみにしている本の一冊だ。

「痛い」の研究

若くして人工股関節置換手術を受けた台湾の友人は、わたしと

文明に追いつけなくて当たり前

この五年間、CRPSや慢性疼痛に関する論文や報告を読み続けて過ごし、医学の進歩の速さを目の当たりにしてきた。ネットの解説だけでも何度か改訂され、進行性とされてきたこの病気も、今では発症後すぐに治療すれば治ること、関節の変形も早い段階でリハビリをすれば予防できることがわかっている。この間、自分の専門分野である言語学においても当然、匹敵するだけの進歩があり、今、わたしは追いつくので必死だ。

一方で、人間の身体は、技術や知識の進歩ほど早くは変化しない。CRPSの話をするとき、原因を聞かれる。それはわからない。でも、発症時のわたしは、少ない睡眠時間とノートパソコンでの長時間の作業が連日続いていた。小さなキーボードを使うときの手の位置は、条件がそろえば関節の損傷を招き得る角度にあったことを後になって知った。わたしたちは今、自然界に存在しないものの「恩恵」にどっぷり浸って暮らしている。時間を問わず活動してしまいう照明、同じ姿勢で一日つきそう機械類、農薬や食品添加物……でも、生物体の進化はゆっくりだ。人間は文明に「追いつけなくて当たり前」、健康格差という概念は、医療機関へのアクセスの悪さや貧困等に結び付けられがちだが、先進国特有の「健康の社会決定因子」も存在するように、今では思われてならない。

「身体を本気で怒らせることになったのはまずかった」（内澤句子『身体がいいなり』）というところに、人類をあげて陥るはめにならないように。医学も言語学も、基本は「人間」学。知の探求や科学や技術の発達を本当の意味での「豊かさ」に結びつけられるように、わたしたちは今、少し立ち止まって考えてみるべき時期にきているのではないだろうか。



内澤句子『身体がいいなり』（朝日新聞出版、2011年）の表紙のイラスト。乳がんをぎっかきけに、身体をえなくなることになった、元気がなくなってしまった、という著者によるエッセイ集

ノルウェーのベルゲンで見つけた大きな木彫りのオオカミウオ。5年ぶりの長期出張、手の調子もまずまず（2012年2月）



域が入っていないことが多いから、わたしの方もこんなプロジェクトは大歓迎だ。

客観的に「痛い」の度合いを測るのは難しい。ある薬の効果を「気のせいかもしれないけどね」というのが口癖になっていたわたしは、ある日、「あなたが楽になるのなら、それでよいではないの？」といわれて、目からうろこが落ちた。「科学」という言葉の支配は強く、研究者であればなおさら「本当に」効いているのかどうかにとらわれがちだ。でも、医学では治せない病気もたくさんあり、「いわしの頭」でも楽になるならそれでよい。「不便の形」が少しやわらかくなるのだから。ただし、効果が感じられないのに代替療法に投資し続けるのはやめよう。

一方で、「気のせい」が気のせいではないかもしれない事実も、だんだんわかってきている。前向きな人は悲観的な人より生存率が高いとか、そんな話もあるけれど、最近講演を聞く機会があったのは、テロメアという染色体の末端を守っている物質のこと。これが少なくなると、病気等にかかりやすくなると考えられているが、その量の減少が生活におけるストレスと連動することがわかっ

経済格差、貧困、労働、流通……。

中学生たちに、世界がかかえるさまざまな問題を、自分たちにもかわりがあるものとして、どのように伝えればよいか。フェアトレードは、その格好の教材だ。

コーヒーをめぐる豊かな文化と南北問題

コーヒーをめぐる豊かな文化や、グローバル化する経済がもたらす問題に気づき、その解決方法のひとつとしてフェアトレードを取り上げる。そんな授業を「コーヒーモノガタリ」と題して五時間で展開した。今年度から中学校の新学習指導要領が全面実施となり、それまで、二つまたは三つの国を事例としていた世界地理も、全地域（アフリカ州を含む六州）を教えることになった。ここでは、羅列的な知識の習得ではなく、主題を設けて、各州の地域的特色を理解させることが求められており、中学一年生を対象としたアフリカ州の学習において、この授業をのびのび実践することができた。

授業の導入は、コーヒー生豆や殻や葉、コーヒーセラモニーの道具など実物を用いたクイズで、コーヒーをめぐる豊かな文化が、エチオピアの人びとの日常のなかにあることを知る。また、生産工程の写真の並び替えから、たくさんの人たちの手を経てわ

心となつてフェアトレードを始めた村だ。フェアトレードの現場を見たくて、二〇〇九年夏にこの村に滞在した時に撮影した写真をワークに用いる。生徒たちは九つのグループにわかれ、机に置いてある三枚の写真に共通するテーマや気づいたことについて話し合い、ワークシートに記入する。数分後にはグループで次の机へ移動し、異なるテーマの三枚の写真を読み取り、これを繰り返し九つのテーマで村をめぐる。大人向けのワークショップでは、ひとつのテーマをじっくり読み取り、他のグループで紹介する方法が効果的だが、生徒たちには、キャプションを貼った複数の写真を、自分で見て歩く方がやっぱり楽しい。

生徒たちの感想は、村の衛生面や教育面の遅れを指摘しながら、「一度行ってみたい」「最低限の生活はできそう」「自分たちの当たり前の生活が当たり前でないことを知った」「自分なら絶対に暮らせない」などさまざまだが、フェアトレードが必要な背景は共通して感じ取ったと思う。フェアトレード奨励金で建てた図書館や中学校については、良かったという生徒が大半だが、「建物だけじゃだめだ」と指摘する生徒もいた。そして、誰もが共通して評価していたのは森の豊かさだ。コーヒーは、バナナや林の木で日陰をつくって栽培され、同じ畑で芋類や豆類など自給用にもなる作物を混作している。また、家畜の糞を堆肥にする循環型農業は環境保全にもなる。子どもたちの笑顔や、村人が工夫して助け合っ

たしたちのところにコーヒーが届いていることを想像できる。次に、コーヒー生産国と輸入国の分布図から、南北問題やモノカルチャー経済について学習する。そこで、コーヒー一杯の価格のうち、生産者の取り分が極めて少ないことを知ったとき、「そんなん暮らせへんやん！」と多くのクラスで声があがった。ただでさえ低いその価格は、激しく変動する国際価格を基準に決められていること、そして生徒たちの驚きの声に伝えるべく、別の価格の決め方があることを紹介し、フェアトレードの存在を知ることとなる。

フェアトレードコーヒーを育てる村を訪ねよう

フェアトレードコーヒーを知った後は、タンザニア・キリマンジャロ山の西斜面にあるルカニ村をめぐるワークをおこなう。この村は、コーヒーの国際価格が史上最低となった二〇〇一年の「コーヒー危機」のあと、辻村英之氏（京都大学）が中

フェアトレードを他の誰かに伝えよう

「村めぐり」の後は、ルカニ村のコーヒーを伝えるポップを作成した。ポップには、このコーヒーを消費者に買ってもらうために、何をアピールしたらいいかを考えて、キャッチコピーやイラストで表現する。フェアトレードが生産者のくらしや環境を守ることにつながるなど、その意味を自分なりに理解していなければできない。学んだことを、他の誰かに伝えることが、問題解決のための社会参加への小さな一歩になると考えて、この授業のまとめのワークとした。

またクラブ活動では、京都YWCAのバザーと学校のクリスマス礼拝で、フェアトレードショップを開き、チョコレートなどの食品や、アジアやアフリカの雑貨などを販売している。さらに、フェアトレードは、途上国（南）の生産者だけを対象にしているわけではないという考えから、京都の紫野障害者授産所や、修光学園などのクッキー類も販売する。こうした施設に訪問してお話を聞いたときには、先進国（北）にも同様にフェア（公正）でないことがあると気づかされる。

フェアトレードを学ぶことで、身近にあるモノの生産者に思いをはせ、消費者としてのフェアを考え行動に移すこと、さらに、フェアトレードを越えて、日常のなかにあるさまざまな不公正なことに気づく目を養い、公正な社会を築く行動につながればと思う。



フェアトレードコーヒーを伝えるポップをつくらう（生徒作品）



ルカニ村を写真でめぐるワーク



フェアトレード・プレミアムで建設中のルカニ村中学校での授業の様子



教材本「コーヒーモノガタリ」表紙



コーヒーセラモニー（エチオピア）



タンザニア・ルカニ村の「家庭畑」で育つコーヒーの木（バナナや林の木で日陰をつくる）



京都YWCAバザーで販売したフェアトレード商品

あらたな聖地巡り

いわたに ひろふみ
岩谷 洋史

立命館大学非常勤講師・民博 外来研究員

自治体とマンガ文化

一九八〇年代後半から日本のマンガやアニメーションは、国際的な注目を集めている。その動きが活発化するなかで、日本国内においてもそれらに対する再評価がおこなわれてきた。たとえば、文部科学省

の『教育白書』（二〇〇〇年度）でマンガやアニメーションが芸術分野のひとつとして位置づけられるなど、いわゆるポピュラー文化に属するものが「日本文化」のひとつであるという地位まで獲得するようになってきた。

その潮流のなかで、まず、思い浮かぶのが、国内外の「国際マンガサミット」や「世界コスプレサミット」などの国際的なイベントの開催である。また、国内におけるマンガ関係の文化施設（ミュージアム、記念館などの名称がつけられる）の設立、さらには、高知県の「まんが王国、土佐」、鳥取県の「まんが王国とっとり」などといったことばに見られるように、地方自治体が主体となつたさまざまな企画の動きである。

なかでも、鳥取県境港市の「水木しげるロード」は、商店街に設置された、水木しげるのマンガに登場する妖怪をモチーフにした、ブロンズ像によって有名になった。こ



水木しげるロード内にある「妖怪神社」

の街は、「魚の街」であつたが、数年間で「妖怪の街」へとも変貌をとげた。近年では、水木しげるのマンガに関連するように、鉄道にねこ娘列車が走り、空港が米子鬼太郎空港と愛称でよばれ、さらには、隠岐島まで水木し

げるロードが延長されるといったように、周辺地域の再編成がおこなわれている。地域が経済的な衰退から脱するために、一人の漫画家が生み出した妖怪をあらたな文化的な資源として見出し、活用しようとしたとき、その地の意味が書き換えられるようになったのである。

愛好家による「聖地巡礼」

一方、こうしたところに訪問する人びとは何を求めるのであろうか。「聖地巡礼」ということばがあるが、ここでいう聖地とは、マンガ、アニメ、ドラマの舞台となつたところである。それらの熱心な愛好家たちが、自分自身が好むものに縁のある土地を聖地とよび、あたかも巡礼のように訪れることをいう。もちろん、そこに訪れるすべての観光客が、熱心なファンであるとは限らない。しかしながら、ここを訪れる人たちは、メディアによって創造されたものを眺め、確認することで、個人の経験に取り込んでいくのである。

みんぱく 私の逸品 メノラー

標本番号 H01668006
地域 モロッコ王国
受入年 1989年

民博 民族社会研究部

すがせあきこ
菅瀬 晶子

日本ではなじみがないが、海外では国が支給するIDカードがひろく普及している。多くは国章がデザインされ、わたしの調査地であるイスラエルのIDカードにも、国章であるオリブの枝にふちどられたメノラーが刻印されている。

メノラーとは、ユダヤ教の儀礼用燭台しやくだいのことだ。ヘブライ語で「灯（ノル）」をとすところ」を意味し、たいていは七枝にわかれた特徴的なかたちをしている。なかには九枝のものもあり、これは紀元前二世紀中葉のエルサレム神殿奪回を記念する祝祭、ハヌカーのときだけ使用される特別なものだ。ハヌカーの季節になると、イスラエルでは広場に巨大な九枝のメノラーが登場し、初日に二つ、その後は一日にひとつずつ、灯がともされる。八日間続くハヌカーの最終日には、すべての枝に灯がともることになる。メノラーは長らく、ユダヤ教のシンボルとして扱われてきた。イスラエルの国章にメノラーが使われているのは、この国がユダヤ国家を標榜ひょうぼうしているためにほかならない。しかし、この国には全人口の約二割に相当するアラブ人（パレスチナ人）マイノリティがおり、彼らはユダヤ教ではなくイスラームやキリスト教などを信じている。ユダヤ教徒（ユダヤ人）ではないのに、そのシンボルであるメノラーをあしらったIDカードを携行しなければならない彼らの胸中は複雑である。

ところで、イスラームの礼拝所であるモスクにつきものの尖塔せんとうは、アラビア語ではマナーラ、つまり「灯（ナール）、光（ヌール）」をとすところ」である。メノラーとまったく同じ成り立ちの単語であり、同じセム系言語であるヘブライ語とアラビア語の近似性を端的にあらわしている。メノラーに宿る灯も、マナーラを照らす陽光も、争いの絶えないパレスチナ・イスラエルに平和をもたらしものであってほしい。人の祈りとはすべて、本来は平和と安寧へと向かうべきものはずだから。



イスラエルのパスポートの身分事項ページ。メノラーの刻印がみられる



リセットされつつける酒場の時間

なかた しおん
中田 梓音
総合研究大学院大学
文化科学研究科後期博士課程

酒場というフィールド
酒場、と聞いて何を思い浮かべるだろうか。酒、グラス、タバコの煙、あるいは歌声かもしれない。わたしが酒場をフィールドにして四、五年が経つ。酒場といっても居酒屋、スナック、クラブなど多種多様であり、そこに集う客もさまざま。今でこそ女性客もごく当たり前であるが、それでもやはり朝から満員電車出勤し、分刻みのスケジュールをこなしながら夜まで働いて家計を支える男性サラリーマンの癒しの場として機能している酒場は多い。



さまざまな酒場の集まる裏通り

をもち、接客者と客の会話の収集を目的に酒場をめぐっていた。現場での観察を続けるうちに、会話以外にも客をもてなすサービスが多様になり、それが後々、売り上げに影響することに気づいた。自分で買って家で飲むよりも高くつくお会計であっても、サービス料が含まれたその金額が妥当だと客に思わせるようなもてなしが酒場には必要であり、そのもてなしが上手い店は常連客をつかめる。というわけで、最近ではそこで交わされる会話だけでなく酒場のもてなしにも注目しつつ酒場調査を続けている。

酒場に入ると、まず客におしほりが手渡される。海外の酒場を訪れる機会もあるが、それらと比較しても、日本の酒場の特徴というところまでいけば、おしほりが思い浮かぶ。夏は冷たく、冬は温かく、おしほりで顔をふいてさっぱりと幸せそうなサラリーマンたちを見ると、一瞬、「男に生まれてよかったかな」と思ったりもする。

水に浸した布の水を切るときにしぼる、という行為がおしほりの語源で、由来は平安時代である。口にくわえた瞬間にタバコに火をつけるという早技を披露する。そして店にもよるが、だいたい灰皿に吸殻が二本溜まると新しい灰皿と交換される。客は自宅や会社のように、溜まっていく吸殻の山を目にすることはないのである。

時間が経つのを忘れるほどに……

さて、ここが一番のポイントであるが、このようなお店には壁掛け時計がない。接客してくれる女性接客者も誰一人として腕時計をつけていないのである。フィールドのママさんいわく、「時間を感ぜさせないため」だという。良いか悪いかの議論は別にして、少なくとも接客する方が時計をチラッと見ることで客に「早く帰って欲しいのかな」と思わせてしまう誤解は防げる。時間を確認しなければ自分の腕時計か、携帯電話を見るしかない客

酒のあるところにタバコあり。最近では分煙にしている酒場も多いが、女性接客者が接客をしてくれる酒場では分煙・禁煙は見たことがない。そもそも客がタバコを吸うという前提で女性接客者はライターを常備している。客がタバコを手取るのを横目で確認すると、談笑しながらライターを握りしめ、客が一本



時計のあるべき場所にはカラオケの画面が



酒場の3点セット(?) おしほり・灰皿・水割り

代にさかのほり、家に訪れた客に渡された濡れた布が始まりといわれている。今では飛行機の国際線や海外の高級レストランなどにも普及した日本発祥の誇るべき「濡れた布」文化であり、客に対して渡すおしほりは、もてなしの心をあらわしていることにもなる。

酒場のもてなしアイテム

おしほりはもてなしの心と述べたが、女性が接客をしてくれる酒場では、おつまみで手が汚れると新しいおしほり、トイレから帰ってくるとまた新しいおしほり、というようにあるが、そうすると女性接客者に「なによ、時間ばかり気にして。約束でもあるの?」とやられてしまう。かくして、客は時計の見えない時間のながれに身を任せることになる。

これまで見てきた酒場のもてなしは、この、時計・時間のからくりにとどり着く。おしほりを頻繁に交換するのも、グラスのなかの水割りをつぎ足すのも、灰皿を入れ替えるのも、つまりは時間の経過の産物を取り消し、時計の針を三〇分〜一時間前に戻す行為ではないか。このリセット効果(とよばせてもらう)によって、客は時間を忘れて楽しく遊べるのかもしれない。

よくよく考えてみれば、「何時何分の電車」、「人との約束はどこで何時」、「スパーの閉店は何時」というような現実の生活は、時計なしでは行動不可能であり、逆に時計が視界に入ることによって次にするべきことを思い出すということもよくあることだ。

このような現実時間を思い出させる時計をあまり設置せずに非現実的空間を演出する某テーマパークのような要素が、酒場にも存在している。それも時間を忘れさせるだけでなく、タイムマシンで過去にさかのぼったかのような錯覚にさえ陥る。しかしそのあいだにも、現実には時間はしっかりと経過しており、ボトルのお酒も確実に減っているのである。

2月

みんなくウィークエンド・サロン

研究者と話そう

■ 14時30分から15時30分

■ 展示観覧料が必要です。

※都合により、予定を変更することがあります。

国立民族学博物館（みんなく）の研究者が来館された皆様の前に登場します！
「研究について」「調査している地域（国）の最新情報」「展示資料について」など、
話題や内容は実に多彩。
どんどん質問をおよせください。展示場でお待ちしております。

3日
(日)

話者：宇田川妙子（国立民族学博物館 准教授）
話題：ヨーロッパの生業と1年
会場：ヨーロッパ展示場

10日
(日)

話者：丹羽典生（国立民族学博物館 准教授）
話題：オセアニアの紛争
会場：オセアニア展示場

17日
(日)

話者：森明子（国立民族学博物館 教授）
話題：ベルリンで既製服が生まれた頃
会場：ヨーロッパ展示場

24日
(日)

話者：藤本透子（国立民族学博物館 助教）
話題：中央アジアの春の祝祭ナウルズ
会場：東南アジア休憩所

1年間みんなくに何度でも入館できる 「みんなくフリーパス(3,000円)」をご利用ください。

本館展示は何度でも無料で入館できます。他にも、みんなくを楽しむための特典がいっぱいです。

- 特典◆本館展示の無料入館◆特別展示の観覧料割引
 - ◆みんなくミュージアム・ショップとレストランの10%割引
 - ◆万博記念公園内および周辺施設での利用割引 など。
- 詳細については、財団法人千里文化財団までお問い合わせください。
(電話06-6877-8893/平日9:00～17:00)

編集後記

やや強引なネタふりだが、今月の特集テーマとの関連で写真についての話である。写真なしの『月刊みんなく』はありえないが、人類学者にとっても写真はデータとしてかかせない。とくにフィールド調査では、二度とお目にかかれなくてもいいかもしれない調査場面の記録のほか、単なる記憶の補助としても大量にとる。民博では30年前すでに研究者のあいだではカラースライドが一般化しており、調査に2、30本ほどのフィルムを携えるのはザラだった。しかしこれらもたまたまスペースをとり管理も容易でない。今日、デジタルカメラが普及し保存媒体も小型化軽量化したが400本ほどのスライドはケースにはいったまま研究室書架の上を数メートル占領している。おまけに10年もたてばスライドは劣化するとかでデジタル化を急ぐ仲間も多いが、作業の面倒さもあり手をつけていない。交換レンズを持ち歩き苦労して撮影した思い出もありスライドそのものに愛着がある、なんて言っている場合ではないのだが。
(庄司博史)

2012年10月号特集の内容に誤りがありました。下記の通り訂正いたします。
p6-7「暴力の採点」にて、p7前から5行目
誤) WBVAでは四ラウンドごとに 正) WBCでは四ラウンドごとに

●表紙：ランプ 標本番号：H0168525 地域：エジプト・アラブ共和国

次号の予告

特集

特別展 マダガスカル 霧の森のくらし

月刊みんなく 2013年2月号

第37巻第2号通巻第425号 2013年2月1日発行

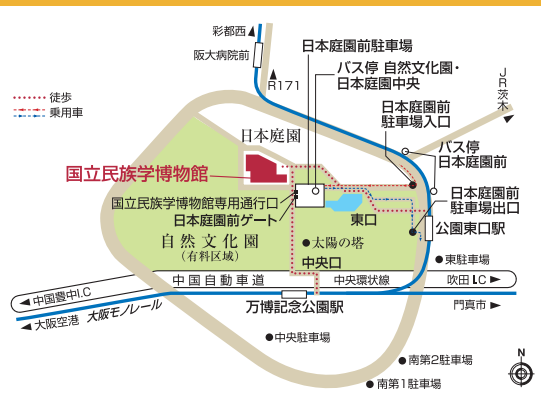
編集・発行 人間文化研究機構 国立民族学博物館
〒565-8511 大阪府吹田市千里万博公園10-1
電話 06-6876-2151

発行人 八杉桂穂
編集委員 庄司博史(編集長) 小川さやか 樫永真佐夫
久保正敏 菅瀬晶子 山中由里子
編集アドバイザー 山内直樹
デザイン 宮谷一孝
制作・協力 財団法人千里文化財団
印刷 日本写真印刷株式会社

*本誌についてのお問い合わせは国立民族学博物館広報係に
お願いします。
*本誌掲載記事の無断転載を禁じます。

交通案内

- 大阪モノレール「万博記念公園駅」・「公園東口駅」下車、徒歩約15分
- 阪急茨木市駅・JR茨木駅・北大阪急行千里中央駅からバスで「日本庭園前」下車、徒歩約15分(茨木方面からは、もっとも近い「自然文化園-日本庭園中央」バス停で下車できるバスが1時間に1本程度あります。詳しくは阪急バスにお問い合わせください。)
- 自家用車は、公園内の「日本庭園前駐車場」(有料)から徒歩約5分。「日本庭園前ゲート」横にある民博専用通行口をお通りください。
- タクシーは、万博記念公園「日本庭園前駐車場」まで乗り入れてきます。



みんなくホームページ

<http://www.minpaku.ac.jp/>

